

目次

まえがき	1
創作ノート（図版）	3
凡例	5

葛原しげる創作ノート 総作品一覧

創作ノート①	6	創作ノート⑮	77
創作ノート②	11	創作ノート⑯	81
創作ノート③	16	創作ノート⑰	84
創作ノート④	22	創作ノート⑱	88
創作ノート⑤	27	創作ノート⑲	92
創作ノート⑥	31	創作ノート⑳	95
創作ノート⑦	37	創作ノート㉑	100
創作ノート⑧	43	創作ノート㉒	104
創作ノート⑨	48	創作ノート㉓	111
創作ノート⑩	53	創作ノート㉔	115
創作ノート⑪	58	創作ノート㉕	120
創作ノート⑫	63	創作ノート㉖	124
創作ノート⑬	68	創作ノート㉗	127
創作ノート⑭	72	創作ノート㉘	144

（創作ノート）作品名索引	148
--------------	-----

葛原しげる童謡集 作品一覧

『小猫の鈴』（文正堂書店、1921年6月）	183
第一童謡集『白兎と木馬』（文教書院、1922年1月）	186
第二童謡集『こんころ踊』（培風館、1923年6月）	189
第三童謡集『かねがなる』（培風館、1925年9月）	192
第四童謡集『葦の笛』（培風館、1928年6月）	196
第五童謡集『葛原しげる童謡集』（日本童謡社、1935年11月）	199
第六童謡集『雀よこい 葛原しげる童謡集』（小学館、1956年11月）	207
葛原しげる童謡集 作品名索引	217
（増補版）あとがき	247

まえがき

『ふくやま文学館所蔵資料シリーズ『福山の文学』第22集 葛原しげる創作ノート全28冊 総作品一覧』は、福山市神辺町出身の童謡詩人、児童雑誌編集者、教育者葛原しげるが書き残した「創作ノート」全作品の一覧である。

「創作ノート」は、最初に作品の目次が記され、次に目次に対応する作品が記されている。内容の中心は、童謡、校歌、社歌、団体歌などであるが、ほかに短歌、随筆などがほぼ創作年代順に記されている。ノートの記述スタイルは変わらないが、ノート自体の判型・頁数は、同一ではない。

例えば、「創作ノート」の第一冊は1907（明治40）年から1916（大正5）年までに創作された作品、葛原しげるが付した目次番号によれば、「一 夕鴿」から「一二三 わが歌う歌に」までがペン書きで記されている。「夕鴿」の例で示せば、一番から三番までの歌詞が記載され、欄外には「大塚音楽会／○明治四十二年十一月／二十三日（第九回演／奏会）／右曲目によれば／第一部／一合唱 会員／甲 夕鴿 作曲者不詳／乙 雁の叫 露国民謡」といった注記がある。最後の「わが歌ふ歌に」には、タイトルの下に「カード楽譜第二十三号」とあり、歌詞の末尾に「大正五、十一、十五夜」と付記されている。

すべての創作に注記があるわけではないが、校歌など依頼校とのやり取りを示す葉書、電文が残されていたり、中には作曲者からの葉書もあり、また、活字になったものの切り抜きが貼付されたものもある。修正、改稿の後が残されているもの、あるいは、第一案、第二案、第三案と作品が完成に向かうまでのプロセスがたどれるものもある。

第一冊の背表紙は剥離し失われているが、第2冊から第20冊までは朱書きで「年号年（漢数字）」が書かれており、第21冊から第28冊（ただし、第26冊は朱書き）までは墨書されている。それを以下に記すと次のようになる。

第1冊（明治40年～大正5年）	第2冊（大正5年～9年）	第3冊（大正10年～11年）
第4冊（大正11年～13年）	第5冊（大正13年）	第6冊（大正14年）
第7冊（大正14年～昭和元年）	第8冊（昭和2年）	第9冊（昭和3年）
第10冊（昭和3年～4年）	第11冊（昭和4年～5年）	第12冊（昭和6年）
第13冊（昭和7年）	第14冊（昭和8年）	第15冊（昭和9年）
第16冊（昭和10年）	第17冊（昭和11年）	第18冊（昭和12年A）
第19冊（昭和12年B）	第20冊（昭和13年）	第21冊（昭和14年）
第22冊（昭和14年～15年）	第23冊（昭和15年～17年）	第24冊（昭和17年～18年）
第25冊（昭和18年～19年）	第26冊（昭和20年～24年）	第27冊（昭和24年～33年）
第28冊（昭和33年～36年）		

葛原しげるの年譜と重ねてたどると、第一冊が書き起こされた1907（明治40）年は、東京高等師範学校3年であり、外国の曲に合わせて作詞を試みた時期である。1909（明治42）

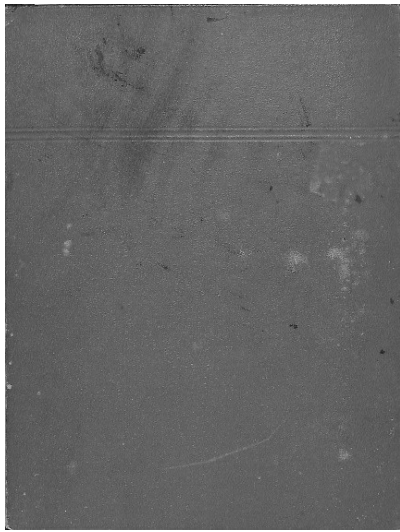
年は、東京高師を卒業した葛原が東京の九段精華学校初等科訓導（小学校教師）になった年であり、この頃から、盛んに童謡が書かれ始め、1911（明治44）年から同文館から創刊された児童雑誌『小学生』の編集主任を兼務する。以後、『少年世界』、『幼年世界』などの博文館編集局時代がしばらく続き、1915（大正4）年には、『新唱歌集』（全12冊）を朝野書店より刊行。第一次世界大戦、日中戦争を経て、太平洋戦争末期の1945（昭和20）年4月の郷里疎開まで、長い東京時代が続く。1946（昭和21）年4月、広島県芦品郡新市町（現・福山市）に創設された至誠高等女学校（現・広島県立戸手高等学校）校長に就任、戦後の郷土福山時代が始まる。創作ノート第26冊からの時代である。1954（昭和29）年11月、中国文化賞（中国新聞社）を受賞、1956（昭和31）年11月、東京の茗溪会館で、童謡四十五年記念祝賀会が開かれる。1959（昭和34）年には、藍綬褒章を受賞する。創作ノートが擱筆された（第28冊）1961（昭和36）年12月に葛原しげるは死去しているので、創作ノート全28冊は、作詩家生活の初めから死の年までの葛原の文学的生涯が凝縮して示される貴重なものとなっている。

作品一覧・書き出しの2行は、むろん全体を示すものではないが、タイトル、短い詩句を俯瞰してみると、それらは「童謡は、こどものものであって、大人の『おもちゃ』であってはならぬ」（「自跋」・『雀よ こい 葛原しげる童謡集』小学館、1956年11月）といい、何よりも不思議、驚きに満ちている子どもの心（『童謡教育の理論と実際』隆文館、1933年12月）を大切にした童謡詩人であった葛原しげるの精神のありどころを示すものでもある。また、本資料は、明治、大正、昭和戦前、昭和戦後と長きにわたった文学的生活の中で、葛原が時代とどう向き合ったのかがうかがわれる童謡詩、校歌、短歌などがあり、きわめて興味深いものとなっている。

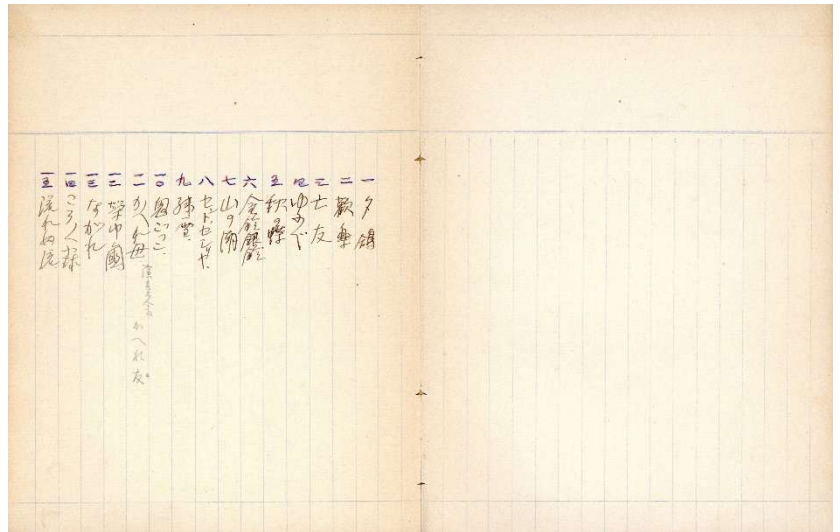
2021年3月

ふくやま文学館館長 岩崎 文人

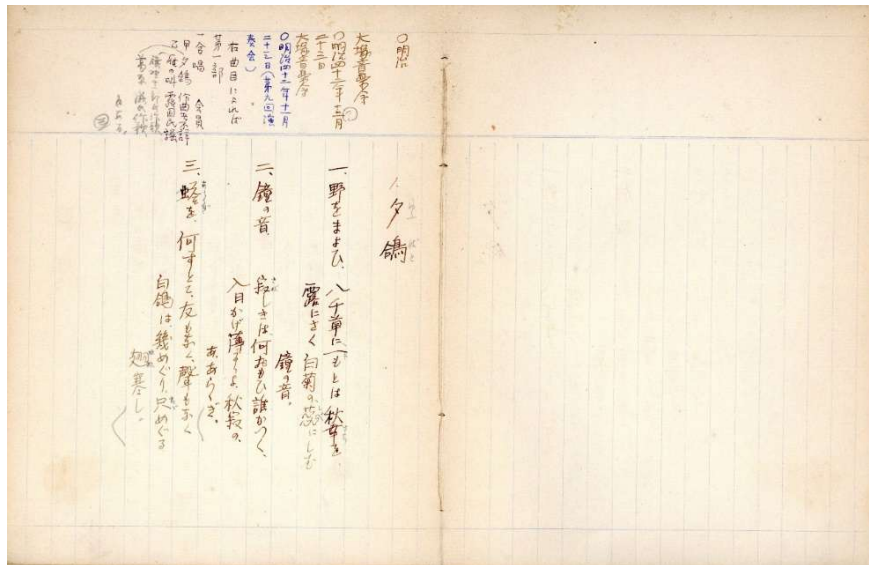
創作ノート① (明治40年～大正5年)



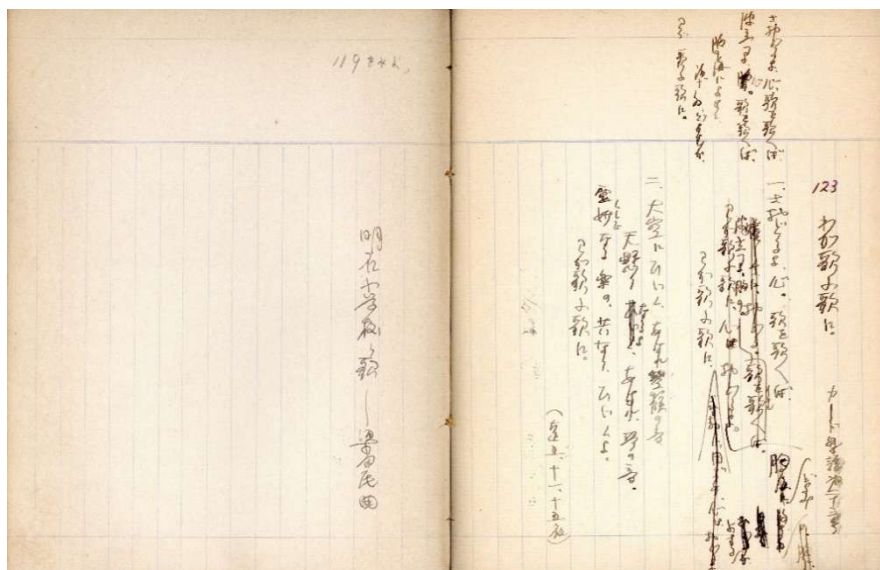
表紙



目次

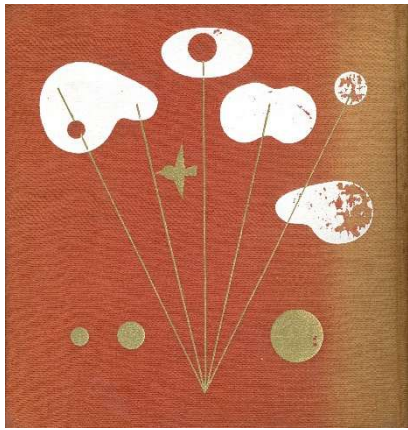


1 ページ



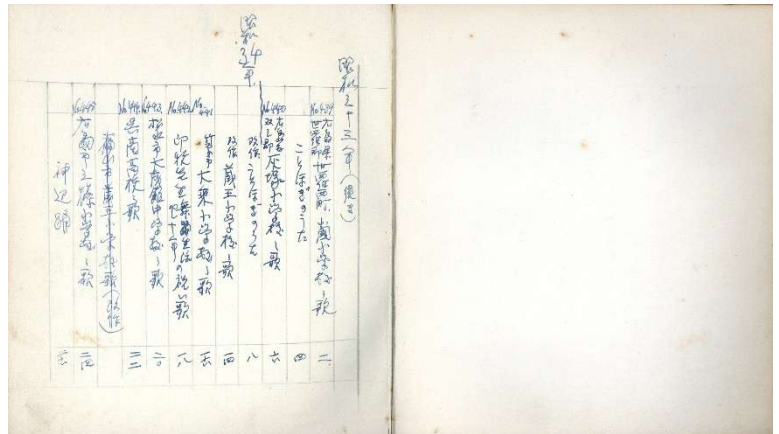
176、177 ページ

創作ノート⑳ (昭和 33 年～36 年)

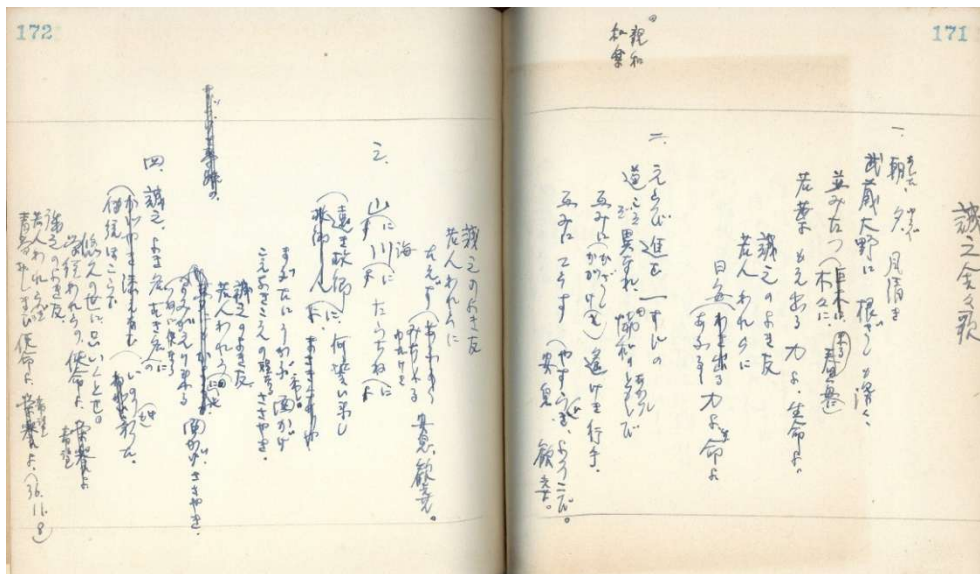
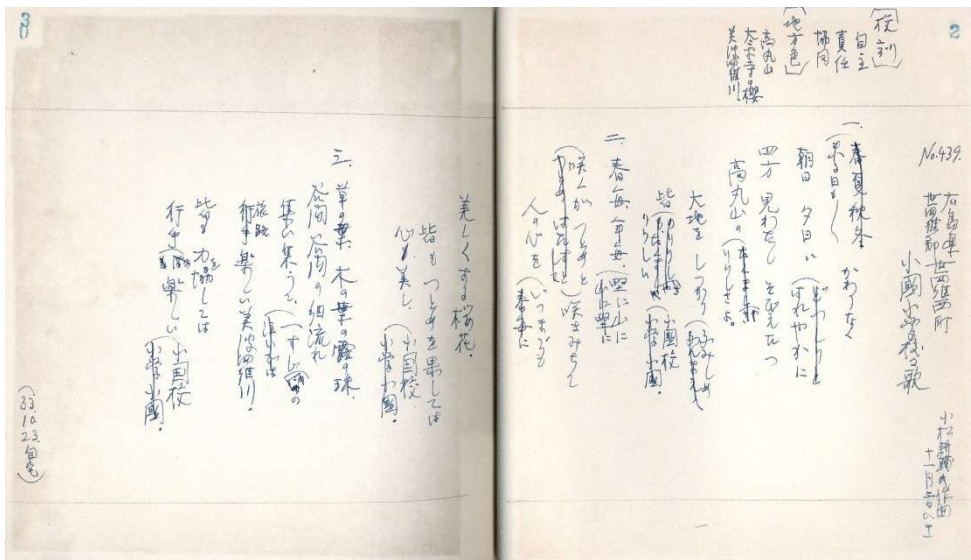


表紙

『雀よ こい 葛原しげる童謡集』
の束見本をノートとして使用



目次



ふくやま文学館所蔵資料シリーズ『福山の文学』第22集
葛原しげる創作ノート全28冊 総作品一覧

本書は、葛原しげるの創作ノート全28冊の掲載作品を対象としたものである。

この創作ノート（全28冊）は、葛原家に大切に保管されてきたもので、葛原しげるの令孫である葛原眞氏より当館へ2020年度に寄付されたものである。葛原家の方々は、葛原しげるの作品を、創作ノートや著書をもとにデータで整理されており、当館へも創作ノートと共に、データをあわせてご提供いただいた。本書は、この葛原家の方々によって作成された作品データをもとに、改めて、本書の総作品一覧を作成したものである。

【凡例】

- (一) 作品名、うたい出し（冒頭）、創作ノートの番号、頁番号、発表紙誌などのメモ、備考の六項目を、ノートの記載順に記した。
- (二) 仮名遣いは、原文どおりとし、旧漢字は、現行の新字体に改めた。
また、名前などの固有名詞は原文の字体を尊重した。
- (三) 踊り字（繰り返しの付号）のうち、くの字点については、かな表記に置き換え、一の字点（ゝゝ）は、そのまま記載した。
- (四) 判読できない文字は□、推測は「カ」であらわした。
- (五) 作品名の角書されている箇所は、|（垂直バー）で示した。
（例）秋田県／男鹿郡|鹿山小学校々歌
- (六) 原文中にルビがある場合は、その語の後に（ ）で示した。（例）木の洞（うつろ）
- (七) 原文中の語句に二種類以上の案が併記されている場合は、いずれも[]で示した。
- (八) うたい出し（冒頭）は、最初の二行を記載し、改行箇所は、「／」で示した。順番を示す「一」「二」などの表記は省略した。
- (九) 作品名索引は、収録巻と頁を次のように示した。
① 123…… 創作ノート第一冊の123ページ

ここに掲載した語句のなかには、今日の人権意識に照らして不適切な語句や表現を含むものもありますが、著者が故人であること、また作品の時代背景にかんがみ、そのままとしました。